

クロソイ放流技術開発調査

(抄録)

山中崇裕・菊谷尚久

放流技術開発

I. 追跡調査

- ・平成11年10月7日に大戸瀬で30千尾、同年10月21日に脇野沢村で68千尾のクロソイ稚魚を放流した。
- ・放流後脇野沢ではアイナメ簗による追跡調査を実施した。
- ・食害種として大型のクロソイとアイナメが確認され、10cm程度の大きさまでは捕食されることが確認された。

放流環境要因調査

I. 市場調査

1. クロソイ漁獲量調査

- ・脇野沢村漁協、大戸瀬漁協のクロソイ水揚げ量を調査した。
- ・脇野沢村漁協の昭和61年からのクロソイ水揚げ量は2.3トンから5.7トンの範囲にあり、平成11年の水揚げ量は5.7トンであった。
- ・大戸瀬漁協の昭和61年からのクロソイ推定水揚げ量は6.8トンから16.1トンの範囲にあり、平成11年は13.6トンであった。

2. 放流魚の再捕結果

- ・7月を基準月とし翌年の6月までを年別再捕尾数として計数した。その結果、平成9年6月までの累積再捕率は0.1～5.78%であった。
- ・脇野沢村について、平均体重から漁獲尾数を算出し、標識率を積算して放流魚の回収率を推定した。推定回収率は0.5%～6.46%となった。

II. 遊漁実態調査

- ・脇野沢村地先でのクロソイの遊漁による釣獲尾数を算出するため、釣り人数調査、釣り日誌、釣獲試験を実施した。
- ・年間400尾あまりの放流魚が釣獲されている計算となり、遊漁による釣獲が無視できない大きさであることを示していた。
- ・脇野沢村漁協でのアンケート結果から遊漁船によるクロソイの釣獲はあまり多くなく、磯釣りなどが主となっていると考えられた。